

## 『高度成長の時代』合評会参加記

2011年7月16日、編者・執筆者の一部の同席のもと、3名の評者を立てて『高度成長の時代』全3巻の合評会が行われた。評者や編者・執筆者、あるいはフロアからは広範な論点が出されたが、議論の大きな軸は評者の一人である渡辺治氏らが精力的に進めて来た企業社会論を通じた高度成長期理解と、そこからの距離の取り方を巡るものだったようと思われる。

渡辺治報告は、企業社会論と政治・社会との接合の仕方を問う評者自身の高度成長時代像を提示した上で、冷戦崩壊・グローバリゼーション・新自由主義改革を踏まえて新たな高度成長期研究を目指す本シリーズの編集意図に賛意を示した。しかしその意図は各論文では必ずしも徹底されておらず、新自由主義から高度成長を見通す見取り図の必要が指摘された。また、原発再開を巡る立地地域の利害という現在進行中の問題も踏まえ、新自由主義改革を経てなお頑強に残存する開発主義型支配の意味を問う論点が提示された。

これに対し、編者の一人である大門正克氏がリプライを行った。大門氏は渡辺氏の企業社会論から受ける影響の強さを認めつつ、「基軸と周辺」という企業社会論の枠組みでは捉えられない問題を捉える「仕掛け」として、本シリーズでは「社会」という視角を重視したと述べた。この方針は、「ジェンダー」「教育」「地域」を主題とする論文の比重が大きいことや、従来の企業社会論では十分に視野に入っていた在日朝鮮人の位置づけという問題提起など、本シリーズの章構成にも表れており、またそれは一定程度成功していると言ってよいように思われる。しかしそのことが逆に、渡辺氏から政治史による総括の欠落という批判を招くことにもなった。

ジェンダーの視点から書評を行った倉敷伸子報告では、「生活世界」の側から主体を立ち上げる必要が主張された。これは大門論文（第1巻序章）で打ち出されている論点でもあるが、ジェンダーを重視する本シリーズの成果を踏まえたより具体的な論点として、アンペイドワークを視野に入れた「雇用労働と労働力再生産労働の再架橋」が主張された。そこで倉敷氏が狙っているのは、会社規範と生活規範とが一致しあるいはせめぎあう、その矛盾的契機のなかに主体形成を見出だすことである。それは企業社会論とは異なるアプローチであり、高度成長期の歴史を描く方法論として今後検討されるべきであろう。

戸邊秀明報告は、個々の論文の内容に踏み込むというよりは、主として本シリーズの企画そのものの方を論じた。とりわけ冒頭では「本シリーズは4冊目が書かれるべきだった」と述べられるとともに、編者・執筆者による座談会のような形で本シリーズの成り立ちや共同研究のプロセス、あるいは本には盛り込むことができなかつた成果などの「手の内」を明かす企画を持つべきだという提案がなされ、大きな反響があった。戸邊氏の主張は、同時代の議論も含めていかなる研究の蓄積の上に個々の論考が成り立っているのかという点で、本シリーズでは「先行研究」との対比がわかりにくいということであった。筆者自身は必ずしもそのようには考えないが、戸邊氏がそのような指摘をしたことは、執筆者の過半が高度成長期の当事者であり、個々の執筆者の同時代における「経験」が、議論の暗黙の前提に置かれるがちになるということに起因するのかもしれない。とするならば、これは現代史研究一般に伴う課題ということになり、研究蓄積を世代間で継承していく上で大きな障害となり得る重要な指摘である。

この研究者の「世代」という点に関して、戸邊氏からは本シリーズでは70年代生まれの執筆者が多く含まれているという特徴も指摘された。これに応じて執筆者のうちで最年少の和田悠氏からは、「高度成長期の当事者ではないので研究・執筆には苦労した」といった旨のリプライがなされた。この点については、和田氏と同年生まれの筆者は違和感を抱かざるを得なかった。同時代の当事者ではないということは、その時代を相対化し対象化する上でむしろメリットになり得るのではないかだろうか。にもかかわらず和田氏が「苦労」されたというのは、本シリーズのもとになった共同研究会の議論の基調が、既述のように同時代の「経験」を暗黙の前提にして進行するものだったことをうかがわせる。この点について、ぜひ戸邊氏の提案する座談会のような場で共同研究プロセスにおける議論のあり方が振り返られることを期待したい。

なお、座談会という形式をとるかどうかはともかく、本シリーズの個々の原稿が執筆された後の段階でいま一度研究会が持たれるべきであったという指摘は、渡辺氏からもなされた。すなわち、出来上がった個別論文を編者・執筆者同士で検討しあい、本シリーズの編集意図と共同研究としての成果が十分に反映されているかどうかをチェックし合い「喧嘩すべき」だったというのである。大門氏からは本シリーズが共同研究として認められたことをむしろ喜ぶとともに、こうした総括について何らかの形で検討する旨のリプライがなされた。

戸邊氏が提案したように本シリーズの「4冊目」の出版ということになるのか、あるいは別の形になるのかはわからないが、一読者として大月書店にも本シリーズの総括へのご助力を願いたい。

中村一成（日本学術振興会特別研究員）